



第5分科会

「身体のコミュニケーション機能とスピーチ」

荒井 好一 氏

(一般社団法人 日本プレゼン・スピーチ能力検定協会 理事長)



・広告会社「大広」経営企画局長や人事総務担当常務執行役員等を歴任
・独自のメソッドで「プレゼン・スピーチセミナー」を数多く開催
■主な著書■

『心を動かす! 「伝える」 技術
2020年五輪招致7人のプレゼンターから学ぶ』(SB新書)

「人と人とのコミュニケーションで、どのように伝えるか、私たちは訓練されていませんよね。今日はその技術を伝授します。」と、講義の冒頭で荒井先生がおっしゃった。スピーチもスポーツと同様に体で覚える技術であり、目や手、声など体の機能をフルに使うと、コミュニケーションが豊かになりキャッチボールができるようになること。最初に訓練生のビフォー・アフターのプレゼン動画を見たが、なるほど表現力の違いがわかる。

続いて先生が「まず『目にコミュニケーション』。相手の目を見る練習をしましょう。」と言われ、参加者が四グループに分かれて、目と声を使い相手を指さす段階から、最後は目だけでパスを送る。会場が笑いに包まれ、和やかな雰囲気になった。開始わずか十分の、まさに『荒井マジック』だ。

「次はペアで、スマホを使って自分の表情をウォッチングしましょう。」テンポよく、先生の声が響く。アイコンタクトの基本として、見る・興味・感謝などを目で表し、自分のスマホ動画で確認する。参加者からは、苦笑いとともに、「難しいなあ〜」の聲が至る所から聞こえてきた。まだまだ訓練が必要だが、目は言葉以上に感情を表現できることを実感した。

続いて『手にコミュニケーション』。ペアで簡単なロールプレイをするが、ポイントはその動きを入れてから言葉を発すること。相手を称えたり励ましたりす

る言葉も、手がリードすることで言葉に厚みが増し、加えて表情も豊かになる。「手によって感情が動かされ、嘘のない声や表情になる。」と先生がおっしゃった。次に、安心や自信、共感などを手で表し、自分をスマホでウォッチング。「皆さん、いい表情していますよ。」先生が言われるように、参加者も次第に表現することに慣れ、楽しんでるように見えた。話す時の手の位置や使い方など具体的な例示は、明日からすぐに役立つものばかりだ。

最後は『声にコミュニケーション』。普段何気なく話している私達は、自分の声の高さや速さを意識していない。まず大切なのは声量。腹式呼吸を全員で実演し、お腹の底から声を出してみる。会場全体が、参加者の低・中・高音それぞれの「あ〜」という大きな声で満たされた。次に大切な点は明瞭。特に母音の正確な口の形を、手や図を使ってイメージしながら発音する。「授業の前に、口のまわりの筋肉を柔らかくするエクササイズを。」と先生がアドバイス。講義も後半になると、参加者は先生に言われなくても自然に声を発したり、先生の問いにすぐ応答したり、「二つでも自分のものにしよう!」そんな強い思いが伝わってきた。

むすびに先生は、ご自身の経験から、誰もがこれまで多くの表現を受け蓄積しており、機会さえあれば驚くべき表現ができると言われた。まだ相手により良く理解してもらう、自分の表現力を使っていないとのこと。また国語の先生こそが、コミュニケーションの先生になつてほしいと、学校用の教材も作成されている。

あつという間に時が経ち、もつと体験したいと感じるご講義だった。改めて、対話すること、相手に伝えることの大切さや、コミュニケーションの力を実感し、授業に、そしてこれからの自分に活かす意欲湧きたつ、貴重な機会となった。

